

われ、その中で、最後に残された第一次的関係とでもいうべき、家族関係へと関心が特化する可能性が示唆された。具体的には、家族といえるときに「充実感を感じる」と答えた若者がかつてないほどに増大していたり、あるいは恋愛至上主義が崩壊していくなかで、再び恋愛が結婚とダイレクトに結びつけて考えられつつあること、いわば親密なパートナーとの「遊びとしての恋愛」（谷本 2008）が終焉に向かいつつあるような傾向がうかがえた。

第三に、個人性領域においては、これも前回論文に引き続いて、全般的な自信の減退傾向、同調志向の強まりが見られ、それと関連して、同質化志向の増大がうかがえた。

最後に、メディア文化受容の実態についてだが、テレビの利用が減少する一方で、携帯電話やスマートフォン、インターネットの利用において増大傾向がみられた。また、いわゆるオタク系文化など、インドア系の趣味の増大傾向がみられたが、マンガについては減少傾向もみられた。

## 8.2. 若者文化は25年間でどう変わったか

こうした結果を全体として振り返りながら、本論文のタイトルに対する回答を考えてみよう。冒頭でも述べたように、世代論的にいうならば、1990年当時の若者たちは「バブル世代」、そして「新人類」あるいは「オタク（正確にはその第二世代）」と呼ばれていた。そして25年後の若者たちは、「さとり世代」「ジェネレーション Y」「デジタルネイティブ」などと呼ばれている（原田 2013、日本経済新聞社 2005、Tapscott 2009 など）。「若者文化は25年間でどう変わったか」という問いに対して、単に呼称が変わったということ以上の変化を、ここで考えてみたい。

すでに述べてきたとおり、本論文が取り上げた全ての領域において大きな変化があった。だが、ここで重要なのは、そうした変化を近視眼的に個別にとらえてしまうのではなく、全体的

にとらえ返しながら、社会学的な解釈を加えていくことだろう。

さもなくば、たとえば個人性領域や対人性領域の結果だけに注目すると、いわゆる「若者バッシング」に当てはまりそうな結果ばかりに見えてしまいかねない。すなわち、「近ごろの若者は対人関係が苦手で、自信を喪失している」あるいは「スマートフォンでインターネットやゲームばかりしている悪影響がみられる」といったように、である。いわゆる「若者の〇〇離れ」という論じ方も、その典型例の一つとして位置づけられよう。だが、このように都合のいい結果だけを切り出して、そこにアドホックに心理学的な解釈を当てはめたり、特定の原因だけに帰責するような振る舞いは、やはり慎むべきではないだろうか。

繰り返して述べてきたように、否定／肯定の極論や特定のトピックに限定しないよう、本論文でいうならば、そうした個人性や対人性領域の結果と、遠隔＝社会領域の結果を照らし合わせながら解釈していくこと、すなわち社会学的に実態を理解していくことが求められているといえよう。

こうした社会学的な視点からするならば、1990年当時の「バブル世代」、すなわち「新人類」と「オタク」たちの文化とは、遠隔＝社会領域における肯定的で安定的な展望を全体として有しながら、対人性や個人性領域における差異化コミュニケーションにその重点が置かれていたものといえるだろう。すなわち、バブル経済の崩壊直後ではあるものの、「就職氷河期」の訪れる前であり、日本社会や若者自身の未来像について肯定的で安定的な展望を抱きつつ、若者たちが華やかな消費文化を最も謳歌した、いうならば「安定期の文化」だったといえるだろう。

それと対照的に、2015年の「さとり世代」や「ジェネレーション Y」「デジタルネイティブ」とも呼ばれる今日の若者たちの文化は、表層的にはインターネットやスマートフォン、ゲームなどの新しいメディア利用ばかりが注目されがちではあ

るが、むしろ遠隔＝社会領域にみられる否定的で不安定な展望と、それと連動した対人関係のリスク化、そしてそれゆえに、自信を持ちがたい状況にあることが目立ち、すべての領域における不安定化が特徴的であった。こうした状況は、一方的に否定的にとらえてしまうよりも、むしろ不安定な状況下で新たな文化を捜し求めている段階、いうなれば、「模索期の文化」であるといったほうが妥当ではないだろうか。

この二時点間の変化を振り返るならば、経済面においては、1990年は、バブルが崩壊したとはいえ、まだ就職氷河期の訪れる前の段階であったのが、2015年には、不景気も長引き、非正規雇用の増大も問題となってきた。そして政治面においても、いわゆる55年体制の下で自民党が安定した与党であった段階だったが、その後2015年までの間には、二度の政権交代があった。

そして今日の若者文化は、グローバル化の急速な進展に代表される、社会の流動化が大きく進みつつある先行きが不透明な状況下に、いかに適応していくべきか、まさに模索している段階にあるといえよう。よって、この25年間における若者文化の変化とは、「安定期から模索期の文化へ」の変化であったといえるのではないだろうか。

やや筆を滑らせるならば、この「模索期の文化」について、二つだけ述べて、本論文を締めくくることとしたい。

第一に、模索の結果は、ある二つの対照的な方向へと進んでいくのではないか、ということである。いわば、不安定で流動的な状況におかれた場合、それに抗おうとするか、むしろそうした状況に棹差してどうにか適応しようとするか、という方向に分かれていくのではないか、ということである。

グローバル化に代表される社会の流動化は、世界規模で進みつつあり、こうした現象は日本だけでなく、世界各地でみられつつある。いわば、いくつかの著名な学者が指摘するように、後期近代

においては、政治経済的に大きな発展を遂げたり、明確な目標を設定することが困難であるような成熟した社会が訪れるとともに、むしろその代わりに、アイデンティティの形成において文化やコミュニケーションの領域がますます大きな割合を占めるようになるのだという。この点については、社会学者のノルベルト・ボルツやシグムント・バウマンの議論も知られているが（Bauman 2011 = 2014, Bolz 1997 = 1998）、著名なのは、ギデنزによる「実存的不安」に対する「存在論的安心」による埋め合わせ、という議論であろう（Giddens 1991 = 2005）。

具体的にいえば、先に5節の対人性領域でも取り上げた項目だが、「H6 同じ若者でも「どうしても理解できない人」がいる」という質問に対する肯定的回答は、90年には67.6%であったのが、その後急増し、05年86.0%→09年85.6%→15年87.6%（05～15年にかけては地域差なし）とほぼ9割近い高い水準で推移してきた。まさに流動化が進むほどに、もはや若者同士であっても、「理解できない相手」がいるのがほぼ当然のこととなっており、今日における模索の方向性は、こうした「理解できない相手」を排除しようとするか、共存しようとするか、という二つに分かれていくのではないだろうか。まさに、「理解できない相手」がいることによる「実存的不安」に対して、排除か寛容かという態度の選択が、「存在論的安心」をもたらすための選択肢となり、さらにはそれがアイデンティティ形成において、ますます大きな割合を占めていくのではないかということである。

これはかつての「バブル世代」における「新人類」や「オタク」が、一見、対照的ではあれ、結局のところは、特定の消費文化に対する、理解や知識の共有に基づいた「連帯」の文化であったのとは対照的に、今日の若者文化は、「理解できない相手」に対する態度の選択によって、分断あるいは対立を深めていくのではないか、ということである。